

『都市の環境倫理』ができるまで

吉永 明弘*

2014年1月に『都市の環境倫理——持続可能性、都市における自然、アメニティ』（勁草書房）を上梓した。千葉大学に提出した博士論文をもとに、大学の「環境倫理」の授業の教科書としても使えるような構成にした。そのため、個人的な思い出や長い謝辞を書くことは差し控えることにした。しかし当然のことながら、著書にまとまるまでに多くの方からご指導やご助言を受け、ご協力を得たのであり、特に「都市の環境倫理」というテーマの性質上、さまざまな分野の方々の知見を参考にしている。本稿では、『都市の環境倫理』の刊行にいたるまでの研究過程を記すとともに、その中でお世話になった方々の名前を記すことで、拙著刊行にあたっての「謝辞」に代えたいと思う。

1. 新潟大学から千葉大学へ (1994.4～2000.3)

私が新潟大学人文学部に入学したのは1994年のことである。現在でも「環境倫理」という分野はあまり確固とした基盤をもっていないが、当時よりもっと脆弱で、分野そのものの存在が危ぶまれていた。そのような中で、指導教員の栗原隆先生には、論文の書き方を一から教わるとともに、先生のご示唆により、ローカルな環境倫理を空間論・場所論・風景論という観点から考察するという着想を得た。その際に、オットー・ボルノウやイーファー・トゥアン、市川浩、沢田允茂らの議論を教えていただいた。『都市の環境倫理』第三章にあるトゥアンの議論の核心部の記述は、学部のときの卒業論文の記述をそのまま用いている。

在学中に、集中講義という形で、加藤尚武先生のご講義を聞くことができた。毎回、正味90分、冗語がなく立て板に水のように話されるのが印象的だった。「環境倫理学を学びたいのですがどんな本を読めばよいでしょうか」という不躰なご質問をしたところ、河宮信郎『必然の選択』（海鳴社）を薦められたことを今でも覚えている。その後も折にふれてご講義をお聞きしたが、歯切れよく刺

激的なお話をされる姿は変わらなかった。

卒業論文執筆の終盤になって、栗原先生からエルスターの「ローカルな正義論」を読むよう勧められた。そこには川本隆史先生からのご示唆があったと聞いた。ローカルな環境論の本はたくさんあったが、それと倫理学との結びつきを考えていたときに、ローカルな正義論という視点を得ることができたのは幸いであった。千葉大学の修士課程に進んでも、そのままローカルな正義論に関する文献研究を行い、それが修士論文のテーマにもなった。そのころに「現代倫理学研究会」に参加し、川本先生にお会いすることができた。川本先生からは、東北大学の「農環境倫理研究会」をご紹介いただき、そこで鬼頭秀一先生とお話しする機会をいただいた。そもそも「ローカルな環境倫理」という枠組は鬼頭先生が『自然保護を問いなおす』（筑摩書房）の中で提示されたものであり、『都市の環境倫理』の問題意識もその延長線上にある。その後、鬼頭先生には本当にさまざまな面でお世話になった。

2. 大学院での演習 (1998.4～2006.9)

千葉大学では、修士課程と博士課程の両方に関わり、飯田亘之先生、高橋久一郎先生、忽那敬三先生からご指導を受けた。特にローカルな正義論の代表者マイケル・ウォルツァー（を批判する

2016年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科准教授 環境倫理学

人々)の論文購読は、英語の苦手な私にとって非常に勉強になった。助動詞 might のニュアンスもゆるがせにしない緻密な読み方をこのときに教わった。そしてこのときに読んだ論文(に対する反論)がそのまま修士論文の柱になった。院生1名に対し教員2名(高橋先生・忽那先生)という演習は、今になってみると得難い経験だったと思う。飯田先生には研究の方向性について相談に乗っていただいた。また将来のことについても気にかけていただいた。そのほか修士課程では、井上兼生さんと中村隆文さんに会い、その後もさまざまな面でお世話になった。岸本卓さんと井上達夫『共生の作法』(創文社)の読書会を行ったことも忘れられない思い出である⁽¹⁾。修士論文には加藤先生と鬼頭先生の議論の要約が含まれているが、これが『都市の環境倫理』第二章の母体となっている。

博士課程では、小林正弥先生のもとで、公共哲学の観点から環境倫理の論文を書くことにした。きっかけは修士課程のころに岸本さんに誘われていった小林先生の演習であった。そこではウォルツァーがコミュニタリアニズムの観点から議論されていた。その後、博士課程を受験し、指導教員をお願いしたところ、快く受け入れていただいた。小林先生の演習には、関谷昇先生や一ノ瀬佳也さんといった強力な研究者が参加し、また宮崎文彦さんや伊丹謙太郎さんのような実力者が他大学から訪れるなど、普通の大学院生(私や宮田裕行さんや小倉朋子さん)が学部生のように見える演習だった。大量の文献を購読する中で、社会科学全般の基本的な知識が身についた。また、あるとき小林先生から、ウォルツァーの911同時多発テロ以降の諸論考を要約して記事を書くよう指示されたことがあるが、そのときに、同一著者の複数の論考を整理してそこに通底する考え方を読み解くという手法が、現代の実践的な哲学研究(公共哲学、応用倫理学)にとってきわめて有効であることに気づかされた。関谷先生には、何度も論文の相談にうかがい、その中で「自覚化」と「具体化」というキーワードをいただいた。当初は3年で博士論文を仕上げると豪語していたにもかかわらず

ず、途中で迷走して5年半かかり、ご迷惑をかけたことをお詫びしたい⁽²⁾。

3. 「翻訳で自然保護ボランティア」からはじまったネットワーク(2001～)

小林先生の演習は公共哲学の文献が中心だったので、環境論の文献は自分で探して読むことになった。そんなときに、「翻訳で自然保護ボランティア」というチラシを見て、少しやってみる気になった。代表の方に連絡をとり、英文原稿をいただいて、それを日本語に訳してお届けした。そのときはそれで終わりと思っていたら、代表の方から「エコリーグ」という団体が主催する会合を紹介された。それは各大学の環境サークルが集結する場所であった。興味本位で顔を出したところ、大部分が理系の学生で、文系の学生は私を含めて3人だけだった。他の2人は高田直也さん(農業経済学)と穂鷹知美さん(環境史)で、話をしているうちに、これも何かの縁だから3人で読書会をしていこうということになった。この「環境論読書会」は東京大学農学部図書館で年に数回行われ、約4年半続いた。このときに読んだ基本文献(例えばナッシュ『自然の権利』、パスモア『自然に対する人間の責任』など)が、『都市の環境倫理』の第一章の記述の基盤をつくっている。この読書会には、途中から、中野区でまちづくり活動を行っている加藤まさみさんが参加し、そのことがさらなる展開を生むことになる(環境論読書会の履歴については【資料1】を参照)。

一方、「翻訳で自然保護ボランティア」のほうは、代表の方が留学するので辞めることになり、代表が代わるという連絡を受けた。やがて新代表から電話がかかってきて、いずれ翻訳をお願いしたいとのことだった。電話の主は道家哲平さんで、当時は千葉大学の修士課程に在籍していた。直接の後輩のはずだがそれまで面識がなく、この電話をきっかけに大学内で会うようになった。その後「翻訳で自然保護ボランティア」がどうなったのか定かではないが、道家さんはそれが縁で、まもなく「公益財団法人日本自然保護協会」(NACS-J)に

勤務することになる。そして何年か後に、私も1年間、道家さんのもとで部下（アルバイト）として働くことになる。そこでの業務は「生物多様性の普及啓発」に関連する国際情報の収集だった⁽³⁾。このときに仕入れた知識や情報が、その後の研究や授業に大いに役立つことになった。『都市の環境倫理』の中の生物多様性に関する記述はすべてこのとき学んだことに基づいている。その後も道家さんには生物多様性に関する国際動向をいろいろ教わっている。生物多様性に関する拙文のチェックをお願いすることも多い。もはや後輩ではなく私の先生の一人といえる⁽⁴⁾。

4. 千葉大学 21 世紀 COE プログラムと環境倫理研究会 (2004.10 ~ 2009.3)

博士課程に在籍中から、千葉大学 21 世紀 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」(研究代表者: 広井良典先生) のリサーチアシスタントとして、シンポジウムや研究会の企画運営を行った。2006 年 1 月には、シンポジウム「風土論・環境倫理・公共性」⁽⁵⁾、2006 年 3 月には、研究会「環境倫理と公共哲学」⁽⁶⁾、2007 年 2 月には、シンポジウム「文明論・環境倫理・公共哲学」⁽⁷⁾を企画運営した。この中で、オギュスタン・ベルク先生、今道友信先生、伊東俊太郎先生という世界的な研究者とお話しすることができた。ベルク先生による和辻哲郎『風土』の現代思想からの解釈、今道先生の「技術連関」における倫理(エコエティカ)という視点、伊東先生の文明史・比較文明論などは、環境倫理学の地平を大きく広げてくれる議論といえる。

大学院修了後も、引き続きフェローとしてプロジェクトに携わることとなり、雑誌『公共研究』の編集を務めることになった⁽⁸⁾。その際に編集工程について一から教えてくれたのが角田季美枝さんである。このときに教わったノウハウはその後大いに役に立った。

COE のスタッフは単なる職場の同僚ではなく、研究者仲間でもあり、議論や情報交換を活発に行っていた。ある日、角田さんが一本の論文をコピ

ーして手渡してくれた。タイトルは“The Urban Blind Spot in Environmental Ethics”。執筆者は「環境プラグマティズム」の提唱者として有名なアンドリュー・ライトであった。それまで、ライトが環境倫理学の現状に対する批判を行っていたことには共感していたのだが、その先に何を提案していたのかは知らなかった。このときに初めて、ライトが「都市の環境倫理」を提案していたことを知った。この論文を読んだことが、『都市の環境倫理』に至る直接の第一歩だった。

2008 年に、COE プログラムの研究成果として、この論文を含むライトの議論を敷衍した論考『環境倫理学』から『環境保全の公共哲学』へ——アンドリュー・ライトの諸論を導きの糸に」を書いた。同年、北海道大学で開催された「第三回応用倫理国際会議」の中のミニシンポジウムで、ライト先生本人の隣に座って、この論文の内容を報告した⁽⁹⁾。

シンポジウム「風土論・環境倫理・公共性」や研究会「環境倫理と公共哲学」の打ち合わせをする中で、鬼頭研究室にお邪魔した。そこで当時、鬼頭研究室に在籍していた福永真弓さんから、バイオリージョナリズムに関する論文をいただいた。環境倫理学と地理学を架橋するような重要な論考だった⁽¹⁰⁾。その後、鬼頭先生の科学研究費プロジェクトにも入れていただき、定期的に行われた「環境倫理研究会」の中で、倫理学、社会学、生態学などの多くの研究者と知り合うことができた。この研究会では最終的に環境倫理学のテキストをつくることにしており、その執筆陣にも加えていただいた。ここで「都市の環境倫理」について報告したときに、森岡正博先生と蔵田伸雄先生から好意的なコメントをいただいたように記憶している。2009 年に、テキスト『環境倫理学』(東京大学出版会)が刊行され、拙論がその第二章「自然・人為: 都市と人工物の倫理」として収録された。後述するように、この論文が『都市の環境倫理』刊行のきっかけとなった⁽¹¹⁾。

5. 千葉大学でお世話になった先生方と友人 (2001.4 ~ 2012.3)

千葉大学ではさまざまな先生にお世話になった。なかでも倉阪秀史先生には、COEプログラムの中で、「永続地帯」の構想や、再生可能エネルギーについていろいろと教わった⁽¹²⁾。『都市の環境倫理』の内容についても事実誤認に基づく記述を訂正していただいた。上村雄彦先生には、グローバルな格差問題、マネー経済の問題点、それらを克服するためのグローバル・タックスの構想などについて教わった。水島治郎先生には、博士論文を読んでいただき、コメントをいただいた。また、演習の一環で千葉市にある柴町のまちづくり活動をされていることを知り、その活動を、後述する千葉市の市民講座の結果報告と合わせて千葉学ブックレットにまとめることをお願いしたところ、ご快諾いただき、コンパクトで充実したブックレット『千葉市のまちづくりを語ろう』（千葉日報社）をつくることができた。広井良典先生には各種シンポジウム・研究会の運営にあたってお世話になった。

COE終了後には、千葉大学の「実践的公共学実質化のための教育プログラム」の特任教員を務めることになった。その期間に院生・若手研究者支援の一環として開催された講座の中で、柳澤悠先生から科学研究費の書類に関するアドバイスをいただいた。石田憲先生、小野智香子さん、崎山直樹さん、伊丹謙太郎さんには業務に関してお世話になった。

博士課程とCOEの期間に出会った友人として、田中紗織さんと桑田学さんの名前を挙げておきたい。田中さんはご自身でも哲学研究を行っていたが、やがて哲学を普及し、若手哲学者を支援する側にまわられた。雑誌『哲楽』を創刊して哲学者の肉声を親しみやすい形で発信し、その一部は『哲学者に会いにゆこう』（ナカニシヤ出版）として刊行された。311の後に行われた鬼頭先生へのインタビューと、臓器移植法改正後に行われた金森修先生へのインタビューには私も同席した。田中さんは英語が堪能で、私の拙い英文をよく直してもらった。桑田さんは経済思想が専門で、環境思想にも詳しい研究者である。原稿を書くたびにお送りして、その都度コメントをいただいた。最近

は気候工学の倫理問題を研究されている。いつ話を聞いても論旨が明快で、彼の話からは多くを学ぶことができる。

6. 学会・研究会でお世話になった先生方と友人（2006.4～）

日本には環境倫理学会が存在しないので、環境倫理学について発表したり議論したりするには、より大きな学会の中の企画に参加しなければならない。日本倫理学会では毎年、環境倫理学関連のワークショップが開かれており、何度かそこに参加した。そこでは丸山徳次先生、紀平知樹先生、蔵田先生とご一緒することが多く、その他の各種研究会でも発表の機会を与えていただいた。奥田太郎先生をはじめとする南山大学の社会倫理研究所の先生方、蔵田先生をはじめとする北海道大学の応用倫理研究教育センターの先生方には、シンポジウムや研究会を通じてお世話になっている。応用哲学会では、神崎宣次さんや寺本剛さんと知り合った。お二人の「環境プラグマティズム」に関する論考は参考になった⁽¹³⁾。

主に東京農工大学で行われていた環境思想・教育研究会では、何度も発表の機会をいただいた。尾関周二先生、亀山純生先生、丸山正次先生からはコメントをいただき、上柿崇英さん、増田敬祐さん、太田和彦さんをはじめ、多くの方々と議論の花を咲かせた。その中で山本剛史さんや熊坂元大さんといった強力な若手研究者とも知り合うことができた⁽¹⁴⁾。

7. トポフィリアの会（2006.6～）

シンポジウム「風土論・環境倫理・公共性」の開催は、当時、角田さんが行っていたプロジェクト「『場所の感覚』の総合政策的検討」と相互作用して、新しい研究ネットワークを生み出した。まず、シンポジウムの前後に、中村紘子さん（環境文化史）や加藤壯一郎さん（都市工学）⁽¹⁵⁾といった若くて意欲のある研究者と出会った。彼らはそのまま、角田さんのプロジェクトが主催する研

研究会にも参加するようになり、岡部明子先生、岸由二先生、鈴木庸夫先生、木下勇先生による刺激的なお話を一緒に聞いた。研究会の後の懇親会でも話は尽きず、どういう流れか、自分たちの若手研究者グループを「トポフィリアの会」と称することが決まった⁽¹⁶⁾。ここに、トポフィリア（場所愛）を共通のキーワードにして、さまざまな分野の研究者が集う、（自称）学術団体が結成されたのである。そこに高田直也さん、道家哲平さんが合流し、一緒に「現地見学」を行うようになった。八ッ場ダム建設予定地見学（道家さんの企画）、長野県栄村の旅（中村さんの企画）、桐生、前橋、富岡紀行（高田さんの企画）など、現地を歩くことによって、各地の特色や問題点を知ることができた。なかでも、自立した村のモデルとされた長野県栄村の見学は、歴史学の大家である大室幹雄先生が同行され、複数の温泉を巡り、当時の高橋彦芳村長と会談するなど、特に充実した企画だった（その他の活動については【資料3】を参照）。

8. 中野区での市民講座から、千葉市の市民講座へ（2005.10～2010.12）

「環境論読書会」に参加していた加藤まさみさんから、中野区の市民向けに講座を開いてほしいとの申し出があった。すでに中野区で活動していた市民団体⁽¹⁷⁾の方々とは面識があったし、中野区のまち歩きにも参加して愛着もあった。そこで、中野区立中央図書館の一室をお借りして、連続講座「中野から考える環境とまちづくり」を始めることにした。

初回の講師として、ジャーナリストの高橋ユリカさんをお呼びして、下北沢の駅前再開発問題や川辺川ダム問題に関するお話をいただいた。二回目は穂鷹さんのご紹介で、環境教育学の高雄綾子さんにお越しいただいた。その後は、トポフィリアの会のメンバーが講師を務めることが多かったが、当時パルテノン多摩の学芸員を務めていた金子淳さんをお招きして、多摩ニュータウンについてお話しいただいた回もある⁽¹⁸⁾。金子さんには

最終回のパネルディスカッションにもご参加いただいた（【資料2】を参照）。

全10回の講座の中で最も大きな収穫だったのが、齋藤伊久太郎さんとの出会いである。当時はお互い千葉大学に在籍していたが、学内では接点が無かった。そのときに中野区の市民団体を通じて初めてお会いしたのである。齋藤さんも連続講座の講師を担当し、その講義で「アメニティマップづくり」という活動を紹介された。

アメニティマップとは、各人がまちの中を歩き、好ましい（アメニティ）と思う場所と、不快だ（ディスアメニティ）と思う場所を、色分けして印をつけたマップを指す。アメニティマップづくりは一種のワークショップである。参加者はまちを歩いてマップを作り、それをもとにまちの魅力や改善点について話し合いをする。そこではまちのさまざまな場所に対する感情や理解が表出され、共有され、可視化されることになる。またそこは地域住民と外部の人たちが、まちの細部について教え、教わるという相互交流の場にもなる。

これは私にとっては、ローカルな環境倫理と都市工学とをつなげてくれる仕組みに思えた。今ではアメニティマップづくりは私の授業の中核をなすに至っている。アメニティマップづくりは学生にとっても評判がよいので、次なる展開として、齋藤さん、加藤壮一郎さんと共同で千葉市の市民自主企画講座に応募した。その結果、3年間、千葉市民によるアメニティマップづくりを実施することができた⁽¹⁹⁾。その活動の成果の一部は、『千葉市のまちづくりを語ろう』に収録されている。『都市の環境倫理』では、第六章でアメニティマップについて詳しく記述しているが、その内容はすべて齋藤さんの論文に基づいている。

「中野から考える環境とまちづくり」の運営にあたっては、当時の中野区立中央図書館長の細木博雄さんに便宜を図っていただいた。また千葉市の市民自主企画講座を行うにあたっては、運営主体である千葉市生涯学習センターの職員の方々、特に講座の担当者だった佐々木陽子さんと手塚有紀子さん⁽²⁰⁾のご助力を得た。

9. 日本アメニティ研究所 (2008.1 ~)

齋藤伊久太郎さんに誘われて、「NPO 法人日本アメニティ研究所」に入会し、そこでさまざまな方々と交流した。理事長の加治隆先生をはじめ、理事の西巻明彦先生と梁瀬悦司さんにはいつもたいへんお世話になっている。定例セミナーでの外部講師の話は毎回興味深いもので、特に真鶴町のト部直也さんの講義は、「美の条例」の精神を伝えるものであった。そのときのお話は『都市の環境倫理』第六章の「美の条例」に関する記述にも反映されている。その他、研究所の活動として、都内各所や川越などに出かけて、地域の魅力を探すことを行っている。日本アメニティ研究所関西支部の黒崎道雄さんと外園勝さんのご案内によって隔年で開催される「滋賀アメニティ探訪」は、毎回、多くの驚きを与えてくれる名企画である。これらによって、アメニティ概念を実感として把握することができた。

10. 地理学者たちとの交流 (2008.6 ~)

ローカルな環境倫理の構築にあたっては地理学者が大きく貢献できるはずである。『都市の環境倫理』の中心部分にあるのは、トゥアンやベルクといった地理学者の思想である。しかし、国内において環境倫理学と地理学はこれまであまり接点がなかった。そんな中、首都大学東京に非常勤講師として出講したとき、鈴木晃志郎先生に出会った。鈴木先生は行動地理学の理論的な研究者だが、近年では地理学の実践的な試みとして、環境紛争地域での合意形成に尽力されている。富山大学に移られてからも、論文の送り合いを重ね、アメニティマップについて地理学の立場から注目していただいた。日本アメニティ研究所の定例セミナーで、軋の浦の架橋問題についてご報告いただいたこともある⁽²¹⁾。やがて『役に立つ地理学』(古今書院)という本をつくるにあたり、その執筆陣に加えていただいた。その後も、日本倫理学会にお出でいただいて一緒にワークショップを開催し、

逆に日本地理学会の分科会にお邪魔して報告を行うなど、分野間の交流を続けている⁽²²⁾。

11. 科学研究費「『都市の環境倫理』の構築に向けた基礎研究」(2011.4 ~ 2014.3)

2011年度から3年間の科学研究費(若手B)を獲得できたことは、『都市の環境倫理』刊行に向けての強力な後押しとなった。とはいえ311の福島第一原発事故が起こったため、2011年度は、原発に関する環境倫理学者の見解を紹介することが主な研究活動となった⁽²³⁾。この事故は世代間倫理の重要性を痛切に感じさせる出来事であった。

2012年度と2013年度に、岸由二先生、間宮陽介先生、和田喜彦先生、宮本憲一先生にインタビューを行った。岸先生には綱島の事務所にお邪魔して何度もお話をうかがったが、とりわけ「秘密基地」の進化論生物学的な意味についてのお話は私の大きな財産となった⁽²⁴⁾。間宮先生の都市論は非常に啓発的であり、ジェイコブズとならんで『都市の環境倫理』第四章・第五章の基盤を形づくっている。和田先生からは、都市の環境負荷と密度の問題を考えるにあたって、「中密度」の街並みが環境負荷を低く抑えることを教えていただいた。『都市の環境倫理』には組み込めなかったが、この点に関する論考を今後執筆する予定である。宮本先生には権利としてのアメニティの意義を教わった。さかのほれば、学部時代に拝読した『都市をどう生きるか』(小学館)が、アメニティ概念にふれた最初の1冊だった。インタビュアーとして、トポフィリアの会のメンバー(角田さん、加藤さん、齋藤さん、道家さん)にご協力いただいた。和田先生と宮本先生へのインタビューは、京都に泊りがけで行われた。祇園祭を前にした京都の市内を皆で歩いたのも忘れ難い思い出である。

さらに、「産廃Gメン」として著名な石渡正佳さんには、江戸川大学でご講演をいただき、廃棄物問題にとどまらず環境問題全般に関する該博な知識を披歴していただいた。奥田太郎先生には倫理学の立場からコメントをいただいた。『商店街

はなぜ減びるのか』(光文社)の著者である新雅史さんには、後述する中野区のジェイコブズ読書会のしめくくりとして、ご講演をいただいた。これらはすべて『都市の環境倫理 資料集』に掲載されている。

12. ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』読書会 (2011.3 ~ 2013.12)

市民講座が終わっても、中野区とのつながりは続いた。時を経て「ジェイコブズ読書会」を開くことになった。これはジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』(鹿島出版会)の新訳が出たことも影響し、有名だけれども必ずしも正確には読まれていないおそれのあるこの本を、一言一句声に出して読みあげていく、という形の読書会であった。この読み方は非常に効果的で、ジェイコブズの思想がその書きぶりを通じてよく見えてきた⁽²⁵⁾。『都市の環境倫理』の中のジェイコブズに関する記述はすべてこのときに読み取ったことに基づいている。主宰者の加藤まさみさんをはじめ、参加された小澤紀美子先生、森田暁さん、山岸厚さん、斉藤睦さん、三田秀雄さん、千成輝美さんの発言からも多くを学んだ。参加者は読書会の後に論考を執筆した。それらは『都市の環境倫理 資料集』に掲載された。

13. 『都市の環境倫理』ができるまで (2010.6 ~ 2014.1)

2010年の6月に、勁草書房の編集者、長谷川佳子さんからメールが届いた。『環境倫理学』に執筆した内容をふくらませて単著にできないか、とのことだった。その後、打ち合わせを重ねて、単著の構成や内容について試行錯誤したが、しばらくは明確な見通しを立てることができなかった。その間に、科学研究費を獲得したことと、江戸川大学に就職したことなども後押しとなり、2012年の後半から刊行に向けた動きが加速した。長谷川さんは、私も執筆陣に加わっていた『コミュニティアニズムのフロンティア』の担当編集者

でもあり、その打ち合わせの際にも「次は単著を」と背中を押していただいた。タイトルは『都市の環境倫理』に決まった。第一章から第三章、および第六章については、博士論文にその後の研究成果を付け加える形で作りあげていった。第四章と第五章は、『環境倫理学』に執筆した論文をふくらませて仕上げた部分である。途中で全文を「です・ます」調に書き直してお送りしたところ、好評だったのでそのまま採用した。2013年の半ばに、残念ながら長谷川さんご病気のため休職された。後を引き継いでくれたのは橋本晶子さんだった。橋本さんにはそれから刊行にいたるまでの全工程でたいへんお世話になった。表紙の写真は妻の百子が撮影したものである。都市の魅力を伝える一枚だと思う。

14. おわりに

振り返ると、『都市の環境倫理』には、「トポフィリアの会」のメンバーから教わったことが数多く含まれていることがわかる。道家さんからは生物多様性を、齋藤さんからはアメニティマップを、角田さんからはライト論文や岸先生の議論を、加藤さんからは間宮先生の都市論を教わった。また角田さんには『都市の環境倫理』の全文を読んでもいただき、詳細なコメントをいただいた。それを参考に修正した部分も数多い。本当は一番に謝意を表さなければならなかった。遅ればせながら、この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

追記

千葉大学の学部時代から小林正弥先生の演習に参加し、大学院生のときにはCOEプログラムや日本自然保護協会に関わり、トポフィリアの会にも加わり、修了後には中野区の活動(AMRやジェイコブズ読書会)にも関わった平進之介君が、2015年6月、地元福岡で交通事故に遭い、亡くなった。平君に出会ったのは2003年の後半だった。政治家を目指して政治学を学んでいた。学生はもちろん教員とも対等に議論することができる人だった。世の中のあらゆることに関心をもち、

会合に誘うとたいいていの場合、来てくれた。「公共哲学センター」に入りびたって、いろいろな話をした。博士論文やその他の原稿を読んでもらい、その都度、意見をもらった。テープ起こしや翻訳を手伝ってもらった。それ以外にも何かと仕事をお願いした。一緒によく旅行をした。熊野、紀伊田辺、白保をまわり、南方熊楠の生家やお墓に行った。別府、湯布院、日田、柳川、久留米、福岡を巡り、ご実家に泊めてもらった。イギリス留学を目指して勉強していた中での突然の死だった。平君のご冥福を祈りたい。

またこの間に、高橋ユリカさん、今道友信先生、柳澤悠先生、金森修先生の訃報に接した。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

【資料1】「環境論読書会」の履歴

- 第1回 2002年11月25日(月) 紹介者:吉永明弘
R. ナッシュ『自然の権利』(岡崎洋監修, 松野弘訳, TBSブリタニカ, 1993年)
- 第2回 2003年2月24日(月) 紹介者:高田直也
J.E. コーエン『新「人口論」』(重定南奈子ほか訳, 農山漁村文化協会, 1998年)
- 第3回 2003年3月7日(金) 紹介者:穂鷹知美
J. ヘルマン編著『森なしには生きられない』(山縣光晶訳, 築地書館, 1999年)
- 第4回 2003年4月2日(水) 紹介者:吉永明弘
J. パスモア『自然に対する人間の責任』(間瀬啓允訳, 岩波書店, 1979年)
- 第5回 2003年5月9日(金) 紹介者:高田直也
武内和彦, 田中学編『生物資源の持続的利用』(岩波書店, 1998年)
- 第6回 2003年7月11日(金) 紹介者:穂鷹知美
D. アーノルド『環境と人間の歴史』(飯島昇蔵・川島耕司訳, 新評論, 1999年)
- 第7回 2003年8月21日(木) 紹介者:須永見子
J. トムリンソン『グローバリゼーション』(片岡信訳, 青土社, 2000年)
- 第8回 2003年10月3日(金) 紹介者:吉永明弘
A. ドレングソン, 井上有一共編『ディープ・エコロジー』(昭和堂, 2001年)
- 第9回 2003年11月6日(木) 紹介者:高田直也
久野秀二『アグリビジネスと遺伝子組み換え作物』(日本経済評論社, 2002年)
- 第10回 2003年12月19日(金) 紹介者:穂鷹知美
R.N. プロクター『健康帝国ナチス』(宮崎尊訳, 草思社, 2003年)
- 第11回 2004年2月6日(金) 紹介者:須永見子
E.F. シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』(小島慶三ほか訳, 講談社学術文庫, 1986年)
- 第12回 2004年3月19日(金) 紹介者:柳田隆文
C. ボンティング『緑の世界史』(石弘之/京都大学環境史研究会訳, 朝日選書, 1994年)
- 第13回 2004年4月30日(金) 紹介者:道家哲平
山村恒年・関根孝道編『自然の権利 法はどこまで自然を守るか』(信山社, 1994年)
- 第14回 2004年6月10日(木) 紹介者:吉永明弘
U. ベック『危険社会』(東廉ほか訳, 法政大学出版局, 1994年)
- 第15回 2004年7月26日(月) 紹介者:高田直也
OECD編『農業の環境便益』(農林水産省農業総合研究所監訳, 家の光協会, 1998年)
- 第16回 2004年9月6日(月) 紹介者:穂鷹知美
川野健治ほか編『間主観性の人間科学』(言叢社, 1999年)
- 第17回 2004年10月25日(月) 紹介者:加藤まさみ
E. カレンバック『緑の国エコトピア』(前田公美監訳, ほんの木, 1992年)
- 第18回 2004年12月3日(金) 紹介者:吉永明弘
服部主郎『人間都市クリチバ』(学芸出版社, 2004年)
- 第19回 2005年1月17日(月) 報告者:穂鷹知美
穂鷹知美『都市と緑』(山川出版社, 2004年)
- 第20回 2005年3月11日(金) 報告者:高田直也
高田直也『熱帯アジアにおける農薬の使用実態と制度に関する研究』(博士論文, 2005年)
- 第21回 2005年4月9日(土) 報告者:吉永明弘
吉永明弘『環境保全の公共哲学』(博士論文草稿, 2005年)
- 第22回 2005年6月18日(土) 報告者:道家哲平, 高田直也
・足尾銅山エコツーリズム(5月4日・5日)報告
・産地(農村地域社会)への出張報告
- 第23回 2005年10月1日(土) 報告者:吉永明弘
・A. エツィオーニ『ネクスト』(小林正弥監訳, 麗澤大学出版会, 2005年)
・下北沢シンポ・多摩散策参加(7月16日・17日)報告
- 第24回 2005年11月12日(土) 紹介者:穂鷹知美
V. パパネック『地球のためのデザイン』(鹿島出版会, 1998年)
- 第25回 2006年3月11日(土) 報告者:高田直也
E. ミルストーン, T. ラング『食料の世界地図』大賀圭治, 中山里見, 高田直也訳, 丸善, 2005年)
- 第26回 2006年5月21日(日) 紹介者:穂鷹知美
藤原辰史『ナチス・ドイツの有機農業』(柏出版, 2006年)

【資料2】連続講座「中野から考える環境とまちづくり」

(講師の肩書は当時のもの)

- 第1回 高橋ユリカさん講演会(話題:下北沢駅前再開発問題, 川辺川ダム問題など)
2005年10月, 講師:高橋ユリカ(ジャーナリスト)
- 第2回 「農のある都市生活:ドイツにおける市民的環境教育の展開—NPO クラインガルテン連合の実践」
2005年11月, 講師:高雄綾子(東京大学大学院)
- 第3回 「レイチェル・カーソンに学ぶ農薬問題の考え方—農産物の安定供給, 環境問題, 食の安全とのかかわり」
2005年12月, 講師:高田直也(農畜産業振興機構)
- 第4回 「エコツーリズムの理念」
2006年1月, 講師:道家哲平(日本自然保護協会, IUCN日本委員会)
- 第5回 「多摩丘陵の開発と住宅地化—多摩ニュータウン開発による環境の変化を中心に」

2006年2月、講師：金子淳（多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）学芸員）
 第6回 「『美の条例』の考察－環境倫理の自覚化と具体化という観点から」
 2006年3月、講師：吉永明弘（千葉大学大学院博士課程）
 第7回 「アメニティを地図にまとめる－住民主体のまちづくりを目指して」
 2006年4月、講師：齋藤伊久太郎（法政大学非常勤講師，AMR会員）
 第8回 「アメリカの景観・真っ直ぐな道」
 2006年5月、講師：加藤まさみ（エコトピアの会）
 第9回 「日本の文脈をふまえた新しいまちづくりをめざして」
 2006年6月、講師：加藤壮一郎（千葉大学工学部4年）
 第10回 パネルディスカッション「まちづくりと公共性」
 2006年8月、パネリスト：高橋克彦（AMR事務局長），齋藤伊久太郎，加藤壮一郎，金子淳，道家哲平，高田直也，司会：加藤まさみ，吉永明弘

【資料3】「トポフィリアの会」活動記録

2006年6月 「トポフィリアの会」結成
 2006年8月 研究発表会（千葉大学松戸キャンパス）
 川くだり（東京都）
 ホタル観察会（千葉市）
 2006年9月 大室幹雄先生の「北越雪譜」講座に参加（千葉大学西千葉キャンパス）
 柴村訪問（長野県）
 2006年10月 岸由二先生の進化論自主講座に参加（綱島／神奈川県）
 2007年3月 丸山康司先生との対話（産業技術総合研究所／つくば市）
 2007年5月 ハツ場ダム建設予定地見学（群馬県）
 雑誌「Topophilia」第1号刊行
 2007年8月 ホタル観察会（千葉市）
 2007年9月 夏合宿・研究発表会（軽井沢町）
 2007年11月 研究発表会（田町CIC サテライトオフィス）
 2007年12月 団地見学（板橋区）
 2008年5月 日光散策（栃木県）
 2008年8月 ホタル観察会（千葉市）
 2008年10月 市民自主企画講座「知ればなるほどまちの魅力——まちづくりコトはじめのマップづくり」（千葉市生涯学習センター）
 2008年10月 川越アメニティマップづくりに参加（埼玉県）
 2008年11月 団地見学（板橋区）
 2008年12月 研究発表会（千葉大学西千葉キャンパス）
 2009年3月 研究発表会（千葉大学西千葉キャンパス）
 2009年4月 上田まちなみ見学（長野県）
 2009年5月 栃木・足利まちなみ見学（栃木県）
 2009年10月 市民自主企画講座「まちの魅力がよくわかる——歩いてつくるまちの地図」（千葉市生涯学習センター）
 2009年12月 まなびフェスタ参加，市民自主企画講座の成果を展示（千葉市生涯学習センター）
 2009年12月 清溪川見学（韓国ソウル特別市）
 2009年12月 研究発表会（千葉市中央区ムーンライトブックストア）

2010年1月 絵地図づくりを行っている市民へのインタビュー（千葉県若葉区）
 2010年2月 京成大久保商店街見学（習志野市）
 2010年3月 真鶴まちなみ見学（神奈川県）
 2010年4月 研究発表会（千葉市中央区ムーンライトブックストア）
 2010年5月 桐生まちなみ見学（ぐんまの休日）
 2010年8月 富岡まちなみ見学（ぐんまの休日）
 2010年10月 市民自主企画講座「まちの未来を描いてみよう——私がつくるまちの姿」（千葉市生涯学習センター）
 2010年12月 まなびフェスタ参加，市民自主企画講座成果発表&市民討論会「ちばの『未来』を語る」（千葉市生涯学習センター）
 2012年3月 『千葉市のまちづくりを語ろう』千葉学ブックレット（千葉日報社），刊行

《注》

- (1) のちに岸本さんはスタジオジブリ社員を経てアニメの脚本家になる。代表作に『うさぎドロップ』『銀の匙』『ハイキュー!!』『銀魂』『モンスターストライク』がある。
- (2) なお、修士課程・博士課程を通じて最も時間をかけて研究したウォルツァーの理論を、『都市の環境倫理』に含みこむことができなかった。その後、『ジェイン・ジェイコブズの世界』（藤原書店）に掲載された論文において、ジェイコブズの倫理学と都市論をウォルツァーの理論を用いて統一的に解釈することを試みた。これによってようやくウォルツァーと都市論とのつながりを見出すことができた。
- (3) 具体的には、2007年4月から2008年3月まで、生物多様性保全のための資金メカニズムや、生物多様性普及啓発マニュアル（CEPA ツールキット）、ミレニアム生態系評価についての英語情報を収集し、内容を日本語で要約して報告書にまとめるというのが仕事だった。あまり知られていない国際的な動向を紹介するという点で、その意義を実感できる仕事だった。
- (4) 生物多様性保全については、吉田正人先生、及川敬貴先生、岸由二先生のご著書からも多くを学んだ。
- (5) 基調講演者はオギュスタン・ベルク先生。セッション報告者は、鬼頭秀一、岸由二、嘉田由紀子、桑子敏雄、内山田康、倉阪秀史、広井良典の各先生。コメントータは高橋久一郎、小川有美、関谷昇、鎌野邦樹、小林正弥の各先生。
- (6) 環境倫理と公共哲学の研究者23人による2日間の討論。参加者は、鬼頭秀一、山田隆夫、白水士郎、丸山徳次、高橋久一郎、関礼子、菅豊、宮内泰介、山脇直司、池田寛二、丸山康司、佐藤仁、倉阪秀史、平川秀幸、池田啓、今田高俊、丸山正次、栗栖聡、千葉真、小林正弥、蔵田伸雄、森岡正博の各先生。またスタッフとして角田季美枝、福永真弓、佐久間淳子、富田涼都の各氏が参加している。
- (7) 基調講演者は今道友信先生と伊東俊太郎先生。コメントータは、鬼頭秀一、倉阪秀史、広井良典、小林正弥の各先生。なお、これらのシンポジウム・研究会の費用には、住友財団環境研究助成の資金が活用されている。
- (8) 『公共研究』は、2004年度に2冊、2005年度からは年

- 4冊、2009年度からは年1冊発行されている。
- (9) 司会は森岡正博先生。他の報告者はアンドリュース・ライト、蔵田伸雄、福永真弓の各先生。
- (10) バイオリージョナリズムについては井上有一先生の諸論考からも学んだ。井上先生とは、鬼頭先生の「環境倫理研究会」でお話しする機会があった。
- (11) この論文は『都市の環境倫理』第四章第一節の母体になっている。
- (12) これに関連して、丸山康司先生からは、COEの研究会で「市民風車」についての興味深いお話をうかがった。
- (13) もっとも、最初に「環境プラグマティズム」の全般的な特徴を知ったのは、白水土郎先生のご論考からであった。鬼頭先生の「環境倫理研究会」では、白水土先生ともお話をする機会があった。
- (14) 現在、寺本さん、山本さん、熊坂さん、増田さんとは、科学研究費（基盤C）「21世紀における「ローカルな環境倫理」についての包括的研究」（2016～2018年度）の研究分担者・協力者として、一緒に研究を行っている。山本さんと増田さんには『都市の環境倫理』の書評を書いていただいた。
- (15) 加藤さんにお会いしたのは千葉大学内の研究会であった。そのとき私は、シンポジウムの準備として、トゥアンとバルクの議論を要約して報告した。そのときに加藤さんからは、トゥアンの話をする人がいてうれしかったと言われた。私もトゥアンの本を読んでいる同世代の人に会ったのは初めてだった。加藤さんとは読書傾向が似ており、お互いに面白い本を紹介し合うようになった。間宮先生の都市論を教えてくれたのも加藤さんだった。
- (16) 私の記憶では「トポフィリアの会」の名付け親は中村紘子さんである。古いファイルには「トポフィリアの集い」という記載もある。現在は結婚されて椎名紘子さんになり、岐阜県白川町で農業を営んでいる。
- (17) 具体的には「エコトピアンの会」および「AMR」（アメニティ・ミーティング・ルーム）という団体の会合に参加していた。その中で、酒井憲一先生、高橋克彦さん、岩本毅幸さん、梅田陽子さんなど、多くの人と交流した。
- (18) 2004年にバルテノン多摩で開催された連続講座「〈景観〉を考える」に参加したところ、たいへん有意義な内容で、景観についての私なりの考えを固める端緒となったので、企画担当者であり当日は司会をされていた金子さんにコンタクトをとっていたのである。この連続講座の中身は、『〈景観〉を再考する』（青弓社）として刊行されている。
- (19) 千葉市市民自主企画講座への応募資格は「千葉市内で活動している団体」だったので、「トポフィリアの会」として企画を出した。齋藤さんはその頃にはもう、なし崩し的に「トポフィリアの会」のメンバーとなっていた。
- (20) 現在では齋藤伊久太郎さんとご結婚されて齋藤有紀子さんになっている。
- (21) 梶の浦の架橋問題については、のちに科学研究費の報告書として刊行した『都市の環境倫理 資料集』に論考を寄せていただいた。
- (22) 最近では北杜市の太陽光発電施設をめぐる紛争に関する論文集を編まれており、私もそこに投稿した。鈴木先生のお仕事は、環境倫理学者の桑子敏雄先生と共通する部分が多いように感じられる。桑子先生は地域の環境整備に関する合意形成の研究を行っている。また『感性の哲学』（日本放送出版協会）の中で、設計者のコンセプト通りに経験することを強いられる「コンセプト景観」を批判している。この点に関する桑子先生の議論に私は完全に同意している。お話を聞く限り、鈴木先生も「観光地」に対して同様の感覚を抱いているように見受けられる。
- (23) その主要な論者であるシュレーダー＝フレチェットの論考の要約を『都市の環境倫理』第五章に収録した。
- (24) 岸先生からの示唆を受けて、秘密基地体験について各大学で学生にレポートを書いてもらったところ、予想以上に面白いレポートが集まった。学生たちも書いて楽しそうだった。その一部を『都市の環境倫理』第五部に収録した。
- (25) この読書会の間にグレイザー『都市は人類最高の発明である』（NTT出版）の翻訳が刊行され、ジェイコブズの議論を外側から考えてみることもできた。グレイザーの議論は『都市の環境倫理』の第五章で大きく取りあげた。また、ジェイコブズを読了した後は、ケヴィン・リンチ『都市のイメージ』（岩波書店）を同様の方法で読んでいった。